

姪の就職活動から見えたもの（2）

7月号のセミナー通信の続きで、姪が就職活動の面接の際に語った体験を書かせていただく。

さて、高校に進学した姪は、個人戦だった柔道をやりきった満足感から、今度は団体の競技に挑戦したくなりダンス部に入部した。同学年は15人で、ほとんどの子が小学校からの経験者。対して自分は全くの未経験。みんな同じゼロからのスタートだった柔道と違って、今度はみんなが先を走っている状態からのスタート。くやしくて、“絶対に追いついてやる”と決意し、部活と並行して街のダンススクールに通うことに。練習に練習を重ね、個人の技量を高めながらも、団体競技であるためチームの人間関係を大切に3年間頑張った。そして、3年最後の文化祭。このステージのセンターは1年から3年までの全部員の投票によって決定する。選ばれたのは何と姪。努力と技術をみんなに認めてもらえ、最前列で踊ることができた。練習の苦しさだけでなく、人間関係の難しさをも乗り越えることができた3年間だった。その後大学は、学校の先生にも塾の先生にも絶対に無理だと言われたところに最後の3ヶ月で大逆転して入学し、部活はサポート業をやってみようとラクロス部のマネージャーに。練習のため、朝4時40分に起きる毎日。やるべきことはきりがなくある一方、手を抜こうと思えばいくらでも抜ける仕事。向上心を持ち続けることが大切と思い、審判の資格をとったり、テーピングの技術を磨いたり等、常に難しいことに挑戦していった。入部した当時大学リーグの2部だったチームは1部に昇格し、4年生になった姪は今、チームのスタッフリーダーとしてみんなをまとめたり、練習メニューを考える毎日を送っている。

2ヶ月にわたり姪の経験を書かせていただいたが、ここで私が最も塾生諸君に伝えたかったこと、それは、“崖っぷちに立つような苦しい状況に追い込まれたとき、踏ん張れる勇気をくれるのは過去に頑張りぬけた自分自身だ”ということだ。これから先の人生、どんな苦しい出来事が待っているかわからない。倒れそうになるその時、つかえ棒になってくれるのは、他にもない、全力で闘って乗り越えた過去の自分自身なのだ。苦しい中頑張り抜けた自分への自信はその後の大きな力になる。姪は、さまざまな苦しい局面を乗り越えた時の心境を、「もうだめだと思ってから、もう一步頑張った。」と語っていた。この根性がしぼり出てくるのは、やはり中学の時の柔道部の経験があったからこそだろう。部活だけの話ではない。何であれ、今の目の前のものに全力でぶつかってほしい。壁が現れたなら、超えられるよう、とことん努力をしてみしてほしい。その自分の頑張りには、必ずや将来の自分を支えることになるだろう。